

子犬の身体的健康と精神的健康のために

今回は子犬に対するワクチン接種の重要性と、子犬の人や犬に対する社会化の必要性を述べてみたいと思います。

そもそも何故子犬にワクチン接種が必要であるか？という事について述べてみます。子犬は誕生時から24時間以内に母犬の初乳を飲むことにより、腸管粘膜から子犬の体内に抗体が移行します。この抗体を移行抗体と呼びます（1部は胎生期にも母犬から移行します）。これが生後間もない子犬を、いろいろな感染症から守る免疫の1つの仕組み（母子免疫）ですが、この移行抗体は時間とともに減少し、ある一定レベルより下がると野外の強毒株に感染するようになります。

そこで子犬自身にワクチンを接種し、個体に免疫を賦与し感染症から犬を防御する事が必要になる訳です。基本的には、1回の接種で免疫が得られる筈ですが、子犬に移行抗体が存在していたり、不適切なワクチン接種であると、抗体が期待通りに上昇せず「ワクチンを接種したけれど効かなかった」という結果になることがあります。そこでその危険性を避けるために複数回の接種が行われることになります。

一般的には生後9週齢に1回目、13週齢目に2回目の接種がお奨めとは思いますが、接種時の子犬の健康状態によっては、思い通りの時期にワクチン接種を受けられない場合もあります。特に発育（栄養）状態が悪かったりするとワクチンの副作用が出現し易く、危険なことがあるからです。健康状態に問題があつて初回のワクチン接種がたとえ80日齢になったとしても、その間に一般家庭で屋内飼養の場合、伝染病に感染する確率を考えれば、ワクチン接種を遅らせることも妥当な判断という事が出来ます。

いずれにしても副作用を起こさないためにも、獣医師さんに接種前1週間の健康状態を説明し、内部寄生虫の感染などのチェックをしてもらつてからの接種が大切です。

もうひとつ子犬にとって大事なことは、人と犬に対する社会化が必要であるという事です。

ワクチン接種が子犬の身体的健康に大事なように、子

犬にとって社会化は精神的健康を涵養するために大変大事なことです。

生後2カ月間は母犬や兄弟と一緒に過ごすことが重要で、生後1カ月目には歯も生え始めて、母犬のおっぱいを強くかじっては叱られ、咬んではいけないもの咬む強さの加減を学んで行き、離乳をうながされるようになります。

生後2カ月目までは興味や好奇心に溢れ、母犬にくっついてまわったり、兄弟犬と遊ぶ中で犬社会でのルールや、コミュニケーションの方法などを学んで行きます。よつてこの2カ月が最も大切で、この期間を過ごすことなく母犬や兄弟犬から離されてしまった子犬は、家庭に迎えられて問題行動を引き起こす確率が高くなります。

ペットショップ等から購入する飼い主さんは、ブリーダーでの子犬の飼育状況は確認できないわけですから、1回目のワクチン接種を終えた子を家庭に迎え入れたなら、子犬が新しい環境に慣れるのを待ってから、なるべく多くの人に触ってもらい、人に撫でられる喜びと、抱きしめられる安心感を与えてやって下さい。場合によっては家の外で抱っこしたまま人に触ってもらったり、外部の騒音に慣れさせる必要もあります。

さらに2回目のワクチン接種、この場合何種類の混合ワクチンを接種するかによつても抗体の上昇に違いがありますが、パルボで1週間、ジステンパーで3週間と言われています。よつて子犬を地面に降ろしたり、他の犬に接触させたりするのは2回目の接種後、3週間後という事になり、子犬同士の社会化の時期を逸してしまつことも多々あります。

尚、最近繁殖所からペットショップに納められる子犬にワクチン接種（この場合子犬に抗体が存在している効果が期待できない場合が多い）をすることが一般的であるため、ワクチン接種が3回になることもあります。

ワクチン接種の日程上犬同士の社会化は遅れることとなりませんが、まず人との社会化を優先し、犬同士の社会化は、ワクチンの抗体が上昇したと思われる期間を経過したのち始めましょう。

次号では、犬同士の社会化について述べてみたいと思います。尚、今回のワクチン接種に関する記述は須賀川動物病院の院長である石井博先生の「ワクチンを有効に使う」を参考にさせていただきました。